ワールド・エンド・サマー

松尾Jr

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ワールド・エンド・サマー

【Ｎコード】
Ｎ６６１７Ｔ

【作者名】
松尾Ｊｒ

【あらすじ】
―――それはどこにでもあるような、退屈で下らない日々だった
―――　※独自設定、独自解釈が続出します。それらを許容できる方はお付き合い下さい。また今後、アニメ最新話および原作最新刊までのネタバレを含む可能性があります。ご注意ください。

七月一四日　日常風景―Ｄａｙｌｉｇｈｔ

とある路地裏に風が吹く。
その風に乗って、ライラックの花弁が舞い上がった。

――――そんな気がした。

◆

—intermission—

七月一四日

日常風景｜Daylight

人間が眠っている間に見る夢には、それを見る人間の数だけ意味が生まれる。
記憶の整理、無意識の願望の表れ、はたまた何かの啓示といった具合に。

（これは……またこの夢か…）

夢の中でとある少年が見る光景は多少の違いこそあれ、大体いつも同じものだった。
眼前に広がるのは普段彼が生活している街。その広大な街のどこかの交差点の真ん中。
だがその様子は現実の街とは少し違っていた。
まるで真夏の昼下がりの陽炎のように道も、人も、建物も、辺り一面がゆらゆらと歪んでいる。

やがて少年はどこへともなく歩き始めた。
気だるそうにポケットに手を突っ込んで臆面も無くそのまま道路のど真ん中を歩いて行く。
しかしそんな少年を咎める者は誰一人いなかった。
否、正確には誰もがまるで少年の存在に気づいていないかのように、それぞれの目的地に向かって歩いている。
少年のほうも周囲の人々の様子を全く気にかけるでもなく、相変わらず気だるそうに足を進める。

しばらくすると少年の目の前に古びた建物が現れた。
一見すると病院か何かのようにも見えるその建物の前に立つと、赤く錆びた門柱の表札に目をやる。

（能、発…一、支…？　ボロボロで読み取れないな…）

表札はかなりの年月が立っているらしく、所々が朽ちて何が書いてあるのかは定かでなかった。
特に目的があったわけではないが、なんとなく負けたような気がし

て少年は大げさに肩をすくめる。
その時だった。

「ゅ……ゃく……」

不意に遠くから声が聞こえた。
何を言っているかまでは聞き取れない、微かな声。

「……ぅ……きて……」

声のする方に振り返る。
長く細い道、その道のずっと向こうにぼんやりと人影が浮かんでいた。
ひとりの少女のように見える。

「わ……は……こ……」

その声はまるで広いホールの中で反響しているかのように
重なり、ぼやけて少年の耳に届く。

（またこれか……）

『この夢』を見るたび決まって『彼女』が現れるのだった。
少女の言葉が何を意味しているかはまったくわからない。
必死に何かを訴えていることだけはわかるのだが。

（誰なんだ、あれは？）

その刹那、少年の頭の中でけたたましい音が鳴り始めた。
それは彼を本来の世界に連れ戻す音。
徐々にその音が大きくなるに連れて周囲の景色が滲み始め、意識が浮かび上がる。

◆

朝日の挿し込む部屋に鳴り響くアラームに意識を無理やり引き上げられ
とある少年、藍咲（あおざき）　夕（ゆう）は目を覚ました。

「……ぁ〝あ……」

なんだかよくわからない呻き声をあげると、反射的に右手を伸ばしさっきから騒音を撒き散らす悪の源――小さな丸い目覚まし時計――の脳天に怒りの一撃を振り下ろす。
たまらずにその小さな機械は勢い良く床に落ち、沈黙した。

「……っ」

ずきり、と左のこめかみ辺りに鈍い痛みが走る。
以前から軽めの偏頭痛とは長い付き合いをしているのだが、
『あの夢』を見た朝はそれが特にひどくなる。

――それに昨夜は大分遅くまで机に向かっていた。きっと寝不足のせいでもあるだろう。
藍咲はそんなことをぼんやりと考えながら体を起こした。

体に掛かっていた薄いブランケットをベッドの隅へ押しやると、
左手でこめかみを押さえながらゆっくりと立ち上がり
ベランダの窓に近づくとカーテンを開け放った。
シャッという音と共に初夏の日差しが部屋を満たしていく。
まだ出かけるまで多少の時間がある。藍咲はだるそうに準備を始めた。

数十分後

勢い良く開いたドアから藍咲が飛び出してくる。

「やっべ……！！」

出かけるまで余裕があるとタカをくくってのろのろと準備をしてい

たため
結局ギリギリの時間になってしまったのである。
忘れずに鍵を掛けると外の階段を駆け下り目的地である学校に向かって走りだす。
かくして少年、藍咲夕の『日常』が始まった。

◆

―――学生。
社会から隔絶され、それとは別の社会空間を作り出す集団。
それは外部からの、一般社会からの干渉を拒絶する『学園都市』においてもその実態は変わらない。
科学を信仰し文明社会の先頭をひた走る学園都市であれ、そこで呼吸をするのはただの人間。
皿に載せてもコップに入れても、無意識に社会を営むただの群生生物なのだ。

緩衝材のような数え切れない程の平凡と一滴の劇薬。
なんの代わり映えもしない人間らしい時間がそこでも変わらず流れている。

そんな平凡で少し怠惰な学園生活を脅かす存在、今日はテストの日である。
藍咲の頭の中はすっかり恐慌状態だった。
このまま遅刻したら一体何のためにあんな遅くまで机に向かったのか。
そして一体何のためにあんな時間に起きたのか。
当然、あのお硬い教師たちが遅刻を見逃すはずもない。

学生とテストとの関係性はどの社会でも大した違いはない。

しかしこれから藍咲たちが受けるそれは『外』の社会におけるものとはある一点で大きく異なる。

彼らが学ぶのは超能力。

量子力学を下地として催眠、投薬、電気ショックなど様々な方法で脳を開発することにより
ひとりにひとつ宿る、ミクロの世界に干渉して超常現象を引き起こす能力。
ここ学園都市ではすべての学生が何らかの能力開発をうけており、
能力を発現した者
すなわち能力者はその引き起こす事象の規模や希少性に応じてレベル別に振り分けられ、
能力開発の為のカリキュラムを組まれる。

藍咲が有する能力は『遠隔転送（アポート）』
学園都市全体を見てもあまり多くない空間移動系の能力である。
物体が空間上を『線』ではなく『点』で移動するという『異なる現実認識』に基づき
十一次元上の座標の理論値を用いて三次元的な制約を無視して物体を移動させることができる。
空間移動能力は自分自身を転移させることが出来れば　大能力（レベル4）に分類されるが、
藍咲の場合はせいぜい　強能力（レベル3）寄りの　異能力（レベル2）
離れた場所の物体を手元に引き寄せるので精一杯だ。

（俺も、レベル4になれば、こんなに、走らなくて、いいのにな、

くっそ）

息を切らして坂を駆け上がる。

特別な才能でもない限りそこまで急激にレベルが上がることなどない。

それは当人が一番良く心得ている。

だがそんな都合のいい妄想にかまけている時間など残されていない。

今はとにかく目の前に突きつけられた遅刻という危機を乗り越えなければならないのだ。

藍咲は第一八学区の長い登り坂を走っていく。

やがておよそ学校には見えない豪奢な建物をその視界に収めると

藍咲はゆっくりと速度を落とし摩天楼のような高い高い中央校舎のその八合目、

そこに埋め込まれた人一人分はあろうかという巨大な秒針を寸分の狂いもなく刻む時計を見やると

安心した面持ちでその両脚を揃えて立ち止まり、絵画のような目の前の風景を一瞥し目を細める。

ライラックに導かれるように続く石畳の道の先にあるそこは紛れもない自分の居場所。

小さな世界に与えられた大きな存在意義。どこかで翔んだ蝶の羽ばたきが前髪を揺らした。

その時目を閉じたのは目が乾きやすい故か、体を通り過ぎる何かを感じたかったからなのか。

———ライラックが初夏の風に染め上げられていくのが分かる。

眩しい陽光も、
耳障りな小鳥の嬌声も、
彼にとっては愛すべき日常。
合理的すぎるこの街。
世界遺産のような荘厳さも風光明媚さもない、けれど一般的な幸福感が傍らで微笑む。

藍咲は鞄を持ち直すと木洩れ日のアーチを軽快な足取りで潜っていく。
真ん中を少し左寄りに歩くのは彼の癖。誰かがそれをまるで「誰かと並んで歩いてるようだ」と言った。
彼自身、妄想癖だという自覚はないがそれを否定的に捉える事はしなかった。
何より、そんな気がしていた。自分の隣には今、こんな場所が誰よりも似合う誰かがいたのではないか？
いても良いのではないか、と。それは例えばお姫様のいない昔話、それは例えば鍵の無い宝箱。

———釈然としない。
けれど嵌らない一欠片。
綺麗な硝子細工をただ漠然と眺めている。
忘れられないのに意味がない。
広大な砂漠で必死に砂を掬い取る。
サラサラと指の間から零れ落ちる。

「……と、こうしちゃいられない」

ロマンチックな思考をどこかへ追いやると藍咲は校舎に入っていった。

◆

「…以上だ。各自午後のテストのために休んでおくように」
担任兼試験監督の教師が連絡を終え、教室を出て行くと同時に
生徒たちは一斉に思い思いの雑談を始める。
（し、死ぬ……）
寝不足の上脳をフル回転させた藍咲は脱力して机に突っ伏していた。
「なー藍咲。調子はどうよ」
前の席の友人が話しかけてくる。
「……眠い」
「もしかしてまた一夜漬けか？よくそれで毎回平均点以上とれるよなお前」
「俺の一夜漬けを舐めちゃいけねえ……」
普段そこまでしっかりと勉強をしているわけでもない藍咲が
毎回そこそこの点数を取れるのはひとえに一夜漬けの賜物である。
「へいへい。しかしあれだよな、お前はやたらと勉強の効率いいよな。
能力（レベル）強度は俺と大して変わんないのに」
目の前の臥体の良い同級生の能力は確か肉体強化レベル３。
自分同様強度は大した事無いが、彼はその能力とは別に格闘技で頭

角を表し
ここ『長点上機学園』への入学を許可されたのだという。
ある程度の能力者ならば素手で対抗できる、らしい。
能力開発において常盤台中学と共に『五本指』の一角をなす
この長点上機学園には少なくとも三種類の生徒がいる。
高レベルの能力者か、レベルは低くとも能力以外の分野で一芸に秀
でた者、
もしくはその両方を兼ね備えた天才。
「要領はいいんだから普段からちゃんとやっとけばいいのによ。も
ったいない」
相変わらず前の席の男は話し続けている。
「別に真面目に勉強したって能力強度が上がるわけじゃないじゃん
か」
どこか開き直った風に、ぶっきらぼうに呟く藍咲。
「そりゃそうかも知れないけど……やれやれだねえ、お前も」
素っ気ない藍咲の返答に友人はおどけてみせる。
――そんなに勉強が大事なら教授にでもなったらいいのに。
ああ、それよりもコイツは警備員（アンチスキル）とかのほうが似合ってるかもな。
眠気と疲れで働かない頭をどうでもいい考えが次々と通り抜けてい
く。

「そういえばお前聞いた？琴峰のやつまたやらかしたらしいぞ」

「へえ……。あっ、ごめん俺トイレ」

友人の話が長くなるであろうことを察知した藍咲はそう言うと教室を後にした。

「つれないのは相変わらずだねえ」

残された友人はただ苦笑を浮かべていた。

◆

もちろんトイレに行く、などというのは長話を回避するための方便
であって
本当に催していたわけではない。

「しょうがない、外行くか…」

ひとまず教室は脱出したものの、昼休みはまだ始まったばかりだ。
とりあえず昼食がまだだったことを思い出したが
生徒でごった返す学食に行く気にはなれず購買で適当にパンを見繕

って買うと中庭に向かった。

さすが学園都市のトップ校というだけあって敷地内の環境は非常に整備されている。
そんな中でも中庭は藍咲のとっておきの場所だった。
中庭は様々な種類の樹木の栽培実験場も兼ねているらしく、さながら植物園のような様相を呈している。
藍咲はその奥の方にあるライラックが生い茂った一角のベンチに座った。
普段のように友人たちに囲まれての昼食も好きだが、たまにはこういうのもいい、などと考えていた。

（今日はやたら眠いし……頭痛いし……）

その矢先、

「Ｉｎｄｅｅｄ　この場所に目をつけた貴方のセンスは賞賛に値するわ」

突然声が聞こえた。
虚を突かれた藍咲は思わず思考を停止して固まる。
普段ここには滅多に人が来ない。
それゆえにここはほとんど自分だけの秘密の場所になりつつあったのだ。

「貴方が考えていることを当てましょうか。
『何故自分しか知らないはずの場所を他の人間が知っているのか』」

おもむろに顔を上げた藍咲の目に写ったのは一人の女子生徒。
ウェーブの掛かった髪に妙な威圧感を持ったギョロ目がこちらを見据えている。

（一体なんなんだ……）

「ｈｏｗｅｖｅｒ　残念だったわね。ここを先に見つけたのは私。
ｂｅｃａｕｓｅ　ここは貴方の場所ではない。お邪魔するわ」

そういうと藍咲の隣のベンチにすっと腰を下ろした。

（なんてこった……）

なるべく彼女のことを気にしないようにしながら、藍咲はパンの袋を開けた。
一口目を食べようとした瞬間、隣から注がれるただならぬ視線に気づいた。
さすがに落ち着いて食べられるはずもなく、藍咲はパンを離すと横を向く。

「あの、俺に何か……」

「貴方、何年生？」

「俺は二年だけど……？」

「貴方は二年生、私三年生。ならば解るわよね。タメ口禁止」

「は、はあ……すみません」

気がつけばいつの間にかすっかり彼女のペースに乗せられていた。
面倒事に巻き込まれそうな予感を感じ、嫌な汗が出始める。

「ｎｅｖｅｒｔｈｅｌｅｓｓ　こんなつまらない日も悪くはないものね」

藍咲を見据えていた視線を外すと彼女はそう言った。
そこで何か言うべきだったのかもしれないが、藍咲は何も言えなかった。
そのまま彼にとっては居心地の悪い沈黙が流れる。
しばらくして突然電話の着信音が鳴った。
どうやらそれは彼女のものだったらしい。おもむろに携帯電話を取り出して耳に当てる。
しかし彼女は何も喋らずもっぱら電話の向こうの話を聞いているだけのようだった。
ようやく一言、わかったわ、とだけ言ったと思うと電話を切ってしまった。

「それも長くは続かないと……」

少しだけイラついた様子で呟くと、立ち上がって再び藍咲を見据える。

「貴方はそのまま平凡な『日常』を貪り続けると良いわ。じゃあね」

まるで吐き捨てるかのような言い方だった。

「はあ……」

くるりと振り返るとその『先輩』はウェーブの掛かった髪を揺らし

ながら去っていった。

（わけわかんねえ……まあいいか、ゆっくりできそうだし）

パンを食べながらさっきまでそこにいた『先輩』の事を考える。
エキセントリックな人間が集まるこの学校の生徒の中でもひと際風変わりな雰囲気。
ああいうのを天才肌というのだろうか。

――――初夏の風に吹かれて、ライラックの香りが鼻をくすぐる。

◆

それから数時間後。

どんよりとしたドス黒いオーラをまき散らしながら校門から出てくる藍咲。
友人たちは皆それぞれの用事があるようで、今日は珍しくひとりで帰ることになった。

「……今日は風紀委員（ジャッジメント）の仕事もないし、
久々にゆっくりできそうだなぁ……ははは……」

明後日、支部に行ったときに目にするであろう未済書類の山を想像し、
追い打ちを掛けるようにテンションが下がっていくのを感じた。

（あー！もういい！今日は速攻で帰って寝てやる！明るいうちに寝てやる）

よし、とひとり謎の気合を入れた藍咲は勇み足で家であるところの学生寮へ向かおうとする。
一歩目を踏み出したちょうどその時、スラックスのポケットに入っていた携帯電話が震えるのを感じた。

（……）

ぎょっとして携帯電話を取り出す。
不思議なもので、悪い予感ほどよく当たるのはこの世界の常だ。
ディスプレイには『風紀委員第一四三支部』の文字。

「……藍咲です……」

『藍咲先輩！すぐに来て下さい！』

思わず顔をしかめて携帯電話を耳から離す。
寝不足の上に頭痛のする頭にはまったくもって優しくない。
キンキン声で喚く後輩の後ろからは、なにやら騒々しい物音が聞こえてくる。

「先に要件を言いなさいよ……あと俺今日は非番じゃなかったっけ……」

『人手が足りないんですっ！今先輩以外の非番の人たちにも招集かけてます！
もう何なんですかね！こう、いくつもいくつも』

「わーかった、わかった！だから何があったか教えてくれよ！」

後半からは完全に愚痴な後輩の言葉を遮るように藍咲も大声で返す。

周りの何人かがこちらを振り向いたが、藍咲は気付いていない。

『本部への報告書の作成、明日の身体検査（システムスキャン）の準備
あといつもの始末書、それにさっき発生したコンビニ強盗の対応！！
手がまわんないですよ！お願いします！』

「あーはいはい！行きますよ！行くから！それまでに少しくらい片付けとけよ！
頼むから丸投げは勘弁してくれよ！」

『了解です！愛してますよ先輩！お茶淹れて待ってますね！』

「おまっ、そんな暇があったら……」

ガチャッ。
藍咲の言葉をほぼ無視する形で電話が切れる。

「まったく……久々の休みを……」

ひとりブツブツと文句を垂れながら鞄に手を突っ込んだ。
取り出した緑色の腕章を袖に付けると、反対方向に向かって走り出す。

騒々しい『日常』は、まだ終わりそうにない。

Jul 14th

"Daylight"

end

七月一四日　日常風景_Ｄａｙｌｉｇｈｔ（後書き）

ひとまず、ここまで読んで頂きありがとうございます。
初投稿なので至らない点は多々あると思いますが…。
気長にお付き合い頂けると幸いです。

七月一五日　学園都市―Ａｓｓｅｍｂｌｅ

七月十五日
学園都市―Ａｓｓｅｍｂｌｅ

『これより身体検査（システムスキャン）実技測定を行います。
対象になっている生徒は速やかに校庭に集合してください』

◆

校内放送に促されてぞろぞろと校庭に出てきた生徒たちは

各々の能力の特性に見合った方式の検査を受ける。
分かりやすく言えば体育のスポーツテストの得意種目だけを測るようなものだ。

「どおおおおおりゃぁぁぁ！！」

目の前の一角では肉体強化系能力者の友人が重さ数十キロのサンドバッグと格闘している。
空手だか柔術だかいまいちわからない技で身の丈ほどのサンドバッグを殴ると
黒い革の袋は中の砂をまき散らしながら飛んでいった。
教師はその様子を見ながら手元の紙に記録を書きこんでいく。

（いやー、すげえな。あんなの食らったら死ぬだろ）

すぐ傍でその様を見ながら藍咲は考えた。
件の友人からさんざん自身の格闘術についての講義をされてきたが
特にその手のものに興味がない藍咲にしてみればムエタイでもカポエイラでも似たようなものだった。
とりあえず彼が強い、ということだけはよくわかったが。

「次ー。藍咲ー」

「あ、はーい」

後ろから教師に呼ばれる。
ようやく順番が回って来たらしい。
ちょうど砲丸投げの競技場のような扇形の中に距離ごとのラインが引かれた場所が
空間移動などの『飛び道具』系能力者の測定場になっている。

藍咲の『遠隔転送』は転移の終点だけが固定されている。
自分を起点に物体を『飛ばす』のではなく自分の手元に『引き寄せる』のだ。
つまり物体に触れずに能力を使えるということで、本来ならそれはそれでかなり便利なはずなのだが、

「最大距離１０ｍ、最大質量３９ｋｇねー」

測定結果を読み上げる教師の声に大きく肩を落とす。

（だめだな……全っ然伸びてないし）

だからといって風紀委員の活動に支障をきたすことはない。
犯人の凶器をとりあげるなど、工夫次第で十分役には立つ。
現に今までもそうしてやってきた。

「んー、今ひとつだけどなー、まだまだ伸び代はあるからな、頑張れよ」

「はーい…」

適当な返事を返す。
教師はああ言うものの、どれだけ時間割（カリキュラム）をこなしても何故か一向に強度が上がらない。
専門チームにでも解析して欲しいもんだ、と内心独りごちる。

とりあえず自分の測定が終わったので列を抜けてぼんやりと周りの様子を見ていると、
突然ズドン、と凄まじい轟音が広い校庭を震わせた。

（おーおー、あいつもやってんな）

音のした方を見やると稲光の閃光に続いてもう一度、ズギャン、と今度はさらに激しい音が鳴る。

音がやむ頃にはちょっとした人だかりが出来上がっていた。

しばらくするとそれを割って一人の男がこちらに歩いて来るのが見える。

「よう藍咲。元気にやってるかー？」

琴峰兼栖（ことみねけんせい）、藍咲の中学時代からの友人である。

「おーお疲れさん。どうですかね、調子は」

「いやぁ全然だめだね！出力は少し上がったけどよ、大したこたぁねえや」

本人なりの謙遜なのだろうか。

そんなことを言いつつも琴峰の能力はレベル４の電撃使い（エレクトロマスター）。

さすがにあの常盤台の超電磁砲（レールガン）には敵わないものの、ここでは十分エリート扱いだ。

「ははっ！ったく、お前が言うと嫌味にしか聞こえないわ！」

このやろう、と琴峰の肩を叩きながら笑う。

「で？昨日はどうだったんだよ。なんか大変だったらしいじゃねえか」

「ああ…そのことね…」

苦笑いをしながら藍咲は応じる。

結局あの後息を切らして支部に飛び込んできた藍咲に
電話をかけてきた後輩は言葉通りに淹れたての紅茶を差し出し、
とびきりの笑顔で目眩がするよな量の書類の山を指し示したのだった。

「まったく大変だな。支部長さんは」

「まあね……」

藍咲は風紀委員一四三支部の支部長を務めている。
普通、風紀委員の支部長になるには自己推薦か風紀委員三名以上の推薦に加えて
面倒な審査などが必要になるが、藍咲の場合それらをすっ飛ばして
風紀委員のトップである委員長直々の指名で支部長になったのだ。
そして藍咲が座らされた椅子はそれだけではない。
———風紀委員幹部。
もうここまでくると一介の風紀委員にはどうやって選ばれるのかすらわからないレベルになる。
しかし当時の藍咲は素直に手放しで喜ぶ気にはなれなかった。それは漠然とした不審感からだろうか。
なぜそこまで自分を取り立てるのか、自分の中に眠る才能を見出されでもしたのか
まさか長点上機という学校名だけで幹部を選任するほど風紀委員も落ちぶれてはいないだろうな、
などと勘ぐってしまったりもした。

「今日は何も無いんだろ？」

「うん、昨日のは完全にイレギュラーだったしね……つーか現場に駆り出されるなんて思ってなかったし」

「強盗だっけか？支部長なのに？」

「ま、そんなときもあるってことだよ」

藍咲は苦笑する。

（支部長の仕事ってのはデスクワークがメインだと思ってたんだけどなあ…）

ようするに人手不足なのだ。
学区によって違いはあるものの、この街の治安はお世辞にも良いとは言えない。
学園都市のネット上には『路地裏が世紀末』などと揶揄する声もある。
加えてこの街の全学生に占める風紀委員の割合はそれほど大きいものではない。
それはトップ校である長点上機学園のある地区を管轄する一四三支部とて例外ではなかった。
『風紀委員』という肩書きはある程度は箔がつくから、進学するときなどはそこそこの加点要素にはなるが
そのあたりはむしろ能力が占めるウェイトが大きいため、皆が皆進んで風紀委員になりたがるという訳ではない。

「お前が風紀委員になってくれればほんとに助かるんだけどなあー」

「いーや、生憎俺はお前ほどボランティア精神と正義感に溢れてるわけじゃねえからな」

「そんな事言わずにさあ、僕と契約して風紀委員に」

「黙れ黙れ」

にやけながら勧誘する藍咲の言葉を琴峰はバッサリと遮る。

「そこは乗ってくれてもいいじゃんか！……まあ冗談だけど」

「わりいな藍咲！他をあたってくれ！」

これもまたいつものやり取りだった。
やはりレベル４は風紀委員でも大きな戦力になる。
とはいっても高位能力者は皆曲者ぞろいというのが経験から導き出した藍咲の持論なのだが。

「ってちげえよ、えーと何の話だっけ……」

「ん、なんだっけ……」

迷子になっている話題を思い出そうと二人は黙り込んだ。

「ああ！そうだよ、お前今日暇なんだっけ」

「あ、そうだ。そう、今日はもうなんにもないよ」

「おーいいねいいね。じゃあさ、久々に遊びに行こうぜ。第七学区のゲーセン」

第七学区のゲームセンターは琴峰のお気に入りのスポットだった。
学園都市中のゲームセンターを渡り歩いた結果、そこが一番いいという結論に至ったらしい。
ここ第一八学区からは結構離れているが、最近は割と頻繁に通いつめているらしく、
つい数日前もそのゲームセンターで常盤台中学の女子生徒（そこで藍咲はなぜ常盤台の生徒がゲーセンなんかに出入りしているんだろうと率直な疑問を抱いた）とメダルゲームを巡った、ちょっとした揉め事があったという話を彼から聞いたのを思い出した。

「えー…遠い…ってまあいいや、どうせ時間あるしな」

「さすが！それじゃ帰りに校門でな！」

そう言うと琴峰は踵を返して颯爽と去っていった。

（最近テスト勉強やら風紀委員やらで忙しかったからな……たまには遊んでもいいよな！）

「おーい、藍咲ー。終わりだってよー」

見計らったかのようなタイミングで後ろから友人に呼ばれる。
琴峰と話し込んでいる間にだいぶ時間が経っていたらしい。

「いま行くー」

そう答えると校舎に戻る生徒たちに合流する。
この後も退屈な授業がいくつも待っているが、
放課後の楽しみができた藍咲の足取りはいつもより少しだけ軽かっ

◆

た。

「……おい、マジかよ……」

二人の視線の先にはシャッターの上に掛かる『改装中』の看板があった。

そこは琴峰おすすめの『第七学区のゲーセン』の前だった。

「いやあ……はは、さすがの俺も予想外だわ……」

琴峰が苦笑しながら言う。

「うおい！……まあいいけどさあ」

「わりい！なんか奢るわ！」

「しょうがない、コーヒー一杯で許してやろう…」

藍咲は胸を張っていかにも勿体ぶった感じで宣告する。

さすがにこの程度で夕飯を奢らせるほど藍咲はサディストでは無かった。

「よっしゃ任せとけ！とりあえずファミレスにでも行こうぜ」

そういうと琴峰はスタスタと歩き出す。

奢らされるのにやけにノリがいいな、と考えながら

藍咲は琴峰を追いかけた。

時刻は午後四時半すぎ。

完全下校時刻まではまだ少し時間がある。

「いやあ、これでメンドクセー身体検査もテストも終わったしな」
「そうだね。しばらくはゆっくり休みたいんだけどね……」
「風紀委員か」
「そう、そうなんだよ！どうして俺のとこばっかに仕事が回ってくるのかね！
これじゃほんとに平の風紀委員と変わんないよ……」
ここぞとばかりに藍咲は愚痴る。
支部の他の風紀委員が無能だという訳では決してないのだけれど、どういうわけか面倒事は率先して藍咲の『手元に飛んで来る』ようになっているらしい。
それを琴峰に言えば能力で仕事まで『持って来』てんのかよ、とからかわれる始末だ。
「まあいいんじゃねえの。そりゃお前がそれだけ頼りにされてるって証拠だろうさ」
「そう言ってくれるとありがたいね」
頼りにされることとアテにされることの線引きは意外と難しいと藍咲は考える。
前者であって欲しいものだと願うばかりだ。
「そういやお前、城南って先生知ってるか？」
唐突に琴峰が言う。

「城南……？発電能力系の授業の先生だっけ？
俺は専攻違うから授業は受けたことないけど」

「そうそう、その城南。俺苦手だったんだよな。なんかすげえヒステリックでさ。
生徒のレベルが上がんねえだのなんだのってうるせえんだ」

だろうなと藍咲は一人で納得した。
琴峰は熱血漢じみた口うるさい教師を何よりも嫌っていた。

「その城南先生がどうかしたの？」

「ああ、辞めたらしいぜ。クビになったって噂だ」

「クビって……なんでまた」

「しーらね。ま、こっちとしちゃ清々したってとこだ」

悪ガキ然とした調子で琴峰は言った。

長点上機学園は必ずしも能力を重視しない。
それに勝る一芸を持っていれば十分にやっていける。
裏を返せばこの上なくシビアな実力至上主義ということでもあるのだ。
第一八学区、特に長点上機は能力のレベルだけに依らない独自の奨学金制度を採用している。
稀ではあるだろうが、下位レベルの生徒が高位能力者よりも大きい額の奨学金を受けることも十分にあり得る。
もしかしたら実力主義なのはそこにいる教師とて変わらないのかも

しれない、と藍咲は思った。
教師は教育者であると同時に能力開発の担当者でもある。
受け持つクラスの実力でその教師自身の地位や何かも評価されていたのかもしれない。

そんな話をしながら曲がり角に差し掛かった。

「まったくな、あんなストレス与えられてたら伸びるもんも伸び…
うおっ！？」

「ぐあっ！？」

突然曲がり角から現れた男子学生と琴峰が勢い良くぶつかる。
あまりの勢いに二人は地面に倒れ込んだ。
男子学生の持っていたスーパーの袋が宙を舞う。

やばい、と隣にいた藍咲は咄嗟に演算をし、能力を発動させる。
放物線を描いて地面に墜落しかけていたスーパーの袋がふっと消えると藍咲の手の中に現れた。

「セーフ……」

ちらりと袋の中を見ると肉や野菜に混じって卵のパックが入っている。
幸い中身は割れていないようだ。

「いってて……」

琴峰が起き上がる。

「おい、いきなり飛び出してくんなよ。つーか大丈夫か？」
尻餅をついてへたりこんでいる男子学生に手を差し伸べる。
「す、すいません……特売品が買えて嬉しかったもんで……」
彼は琴峰の手を掴むと起き上がった。
「ってあれ、袋は！？俺の戦利品は！？」
とんでもない焦りようだ。
見かねた藍咲は袋を男子学生に渡す。
「はい、これ。中身は無事みたいだよ」
「あああああありがとうございます！くーっ、今日の上条さんは恐いくらいツイてますよ！」
小躍りしながら袋を抱きかかえるツンツン頭の男子学生を若干引き気味に見つめる藍咲と琴峰。
世の中には特売品でここまでハッピーな気分になれる人もいるんだな、と二人は思った。
「いやあ、ほんっとにありがとうございます！この御恩は一生忘れませんよ…！」
「あー、えーっと、良かったね。はは、それじゃ俺らはこれで……」
それに続いて琴峰もじゃあな、と手をあげる。
号泣せんばかりの勢いで礼を言う学生を残して二人は歩き始めた。

男子学生が見えなくなったあたりで琴峰が藍咲を小突いて言った。

「お前大活躍じゃん」

こんな能力でも役に立つだけいいかなと藍咲は思った。

だがしかし、その男子学生こと上条当麻がその次の交差点でまた別の通行人にぶつかったこと、

今度はスーパーの袋（せんりひん）をキャッチする者は誰も居なかったことを二人は知らない。

Ｊｕｌ　１５ｔｈ　”Ａｓｓｅｍｂｌｅ”　ｅｎｄ

七月一五日　学園都市―Ａｓｓｅｍｂｌｅ（後書き）

ありがとうございました。
日常生活で一番役に立つ能力というとやっぱり空間移動ですかね。
本編中のようなこういう夢の無い使い方も悪くないかもしれません
（笑）

七月一六日　風紀委員の日々―Ｊｕｄｇｍｅｎｔ

巨大な機材がビルのように立ち並ぶ無機質な部屋に
けたたましいサイレンの音が鳴り響いた。

「急げ！すぐに監視システムを自動管制に切り替えろ！
『感覚』を奪われるぞ！」

「『ターミナル』のＡＩＭが虚数値を示しています！干渉係数測定
不能！
これ以上はパーソナルリアリティが……」

「くそ…実験は中止だ！本部にバックアップの要請を」

管制室と分厚い強化ガラスで隔てられた部屋の中心には
直径数ｍのリングの中に据え付けられた棺のような物体。
その光景はまるで磔にされた『神の子』の姿にも似ていた。
今やその部屋一面が緊急事態を知らせる真っ赤な光で溢れている。

「監視をフルオートに切り替えました！」

「よし、退避後上層ブロックにＡＩＭジャマーで擬似防壁を展開、『これ』を拘束する」

白衣の男たちは慌てて部屋から飛び出していく。
最後の一人が出て行くと出入口に強固なシャッターが下ろされた。
外界から完全に遮断されたこの部屋には、しばらく誰も立ち入ることは出来ないだろう。
部屋に残されたのは壁を埋め尽くす様々な計器のランプと中央の巨大な『棺』だけ。
見る者のいなくなったモニターには心電図や脳波グラフと思しきデータが表示されている。

それは『棺』の中に人がいることを表していた。

七月十六日

風紀委員の日々―Ｊｕｄｇｅｍｅｎｔ

◆

「藍咲先輩！例の事件の新しい資料が送られてきましたよ！」
風紀委員第一四三支部、藍咲のデスクに分厚い紙束を抱えた後輩が駆け寄ってくる。
藍咲はコーヒーを啜りながら左手でそれを受け取って、一番上の紙にさっと目を通した。
「連続虚空爆破事件……」
最近学園都市で起こっている事件のことだ。
アルミを起点に重力子を加速し、周囲に拡散させることで爆発を引き起こすというもので
既に怪我人も出ている。さすがにこれを単なる悪戯ということで済ませるわけにもいかず、
風紀委員各支部はそれぞれ調査を進めているところだった。
「発生直前に重力子の加速が観測されるくらいで、犯人の手がかりは今のところ皆無。
目撃者もいないし、読心能力者（サイコメトラー）の鑑定でも有力な証拠は出ず……」
アイスコーヒーのグラスを机に置く藍咲。
中の氷がからん、と音を立てた。

「正直さっぱりですねよ……。該当能力は量子変速（シンクロトロン）、事象規模からみて
強度はレベル４程度、書庫を検索した結果該当者は学園都市でたったの一人……」

「だけどそいつはずっと入院してて犯行は不可能、と」

はあ、と二人は同時に溜息をつく。
事件現場は第七学区内のかなり広い範囲に渡っている。
該当者の容態まではわからないが、入院患者が気軽に出歩けるような距離ではない。
かといって同系統の下位能力者にこの規模の事象が引き起こせるとは考えにくい。

「わたし、もう少し調べてみます。ほら、最近いろんなとこで身体検査やってるじゃないですか。
もしかしたら測定結果が更新されてない箇所があるのかもしれません」

「悪いね、ほんとならあいつの仕事なんだけど」

「しょうがないですよ。梓馬先輩は今日非番なんですから！」

（俺が非番のときは呼び出しておいて…くっ…）

任せてください、と薄い胸を張る後輩の得意げな笑顔を見ながら
藍咲は心のなかで毒づいた。
（ちなみに彼女に胸の話題を振った後は、決まってたっぷりの『塩』が入ったコーヒーが振舞われる）

ともかくここでのデータ解析にはまだ時間がかかるだろう。
藍咲はとんとん、と紙束を整えて引き出しに仕舞うと立ち上がった。

「あれ、どこか行くんですか？」

くりくりした目が藍咲の顔を覗き込む。

「第七学区に行ってくるよ。遺留品とかも直接見たほうがいいだろうし」

「そうですね！それじゃあ先輩の留守はこのわたしが預かります！支部長代理として！」

「お、おう…。じゃあ任せるかな…」

彼女の迫力（めんどくささ）に圧された藍咲は思わず即答してしまう。
一方彼女は得意げにえっへん、と再び胸を張る。

「任せてください！女は度胸ですから！」

「胸はないけどな…」

誰かが横からそう呟くのを彼女が聞き逃すはずがなかった。
一瞬にして部屋の空気が凍りつく。
その場に居た全員の「やっちまったな」という視線の先にはＰＣで作業をしている男がいた。
完全に無意識だったらしく、涼しい顔でキーボードを叩いている。
満面の笑みを浮かべた彼女が近づいてくると、彼はようやく自分の置かれた状況の深刻さに気づいたようだった。

だがもう遅い。

「ねーぇ、さっきからずっと作業で疲れたでしょ！冷たい物でも飲む？
あっ、むしろ冷房効き過ぎてて寒いでしょ！あったかいのにしようか！飲むよね！全部飲むんだよ！」

そこにいた全員が笑顔の彼女の背後に般若の面を幻視した。
彼女にロックオンされた哀れな後輩に心の中で合掌しつつ、藍咲はドアに手を掛ける。

「えーと…じゃあみんな、ちょっと行ってくるから」

よろしくと言うとドアを開けてそそくさと出て行く。
藍咲の去った部屋の中には、真夏だというのに熱いコーヒーを淹れる音と
楽しそうな鼻歌だけが空しく響いていた。

◆

（あっつ……）

乗っていたバスが第七学区に着き、音もなくドアが開く。
この季節、冷房の効いた室内から外に出る瞬間はまさに地獄だと藍咲は思う。
さすがの学園都市でも夏の暑さばかりはどうしようもないらしい。

（あっつ……）

それに今はちょうど昼過ぎ。一日で一番暑い時間帯だ。
あまりの暑さに遠くのほうが陽炎で揺らめいて見える。
それを見て、なんとなく『夢』のことを思い出していた。

（夢の中に出てくる知らない人は幽霊だ、とか誰かが言ってたっけ。
つーかあれは家の中の夢の話か）

夢の中に決まって出てくる『少女』の事がずっと引っかかっていた。
何かある気がするのだが、そのことを考えようとすると頭が痛くなってきて
いつもそれ以上考えるのを止めてしまうのだった。

（運命のなんとかとか、そんなとこか？いやいや、俺はそこまでロマンチストじゃないっての）

誰かに言えば痛々しい妄想だなどと言われてしまいそうなことだったが、
さすがに一回くらい誰かにちゃんと聞いてもらうべきなのだろうか、とも思う。

（意外と兼栖はこういうの乗ってきそうだな）

また今度機会があれば話してみるのも悪くはない。
むしろ琴峰ぐらいにしかこんな話は取り合ってもらえないだろう。
なにせ長点上機という環境が環境だけに、堅苦しいリアリストが多いのだ。

（そのうち話してみるか）

「あれ？藍咲さんじゃないですか」

不意に飴玉を転がすような声がした。

――――最近やけに突然声を掛けられるな。
そんなことを考えながら藍咲は振り返った。

「ああ、初春か」

文字通り頭に花畑を乗せた後輩、初春飾利がそこにいた。
彼女の属する風紀委員第一七七支部とは、とある事情から親交が深い。
藍咲が今まさに向かっているのもその一七七支部だった。

「えーと、初春、誰？この人」

初春の隣にいた少女が言った。
初春と同じ制服を来ているところを見ると、おそらく彼女の同級生か何かだろう。

「この人は風紀委員の先輩の藍咲夕さんですよ、佐天さん。
あっ、藍咲さん、こちらは私の友達の佐天涙子さんです」

よろしく、と藍咲が言うと佐天はやや緊張したように、どーも、と返した。

「ところで今日はなんでこんなところにいるんですか？」

「いや例の案件でね、こっちの支部にある遺留品を見せてもらおうと思って」

藍咲が説明する。

「そうですかあ。おつかれさまです。

あっ聞いてくださいよ！私たち今日とうとう会えるんですよ！」
興奮気味に初春が語り出す。
「会えるって、誰に？」
「聞いて驚かないでくださいよ…！なんとあの御坂美琴さんにです！」
「御坂美琴……常盤台の超電磁砲か？」
「はい！白井さんが紹介してくれるんです！」
初春の目がキラキラと輝いている。
学園都市に七人しかいないレベル５、その第三位にして最高位の電撃使い。
超電磁砲、御坂美琴。
琴峰がにわかにライバル視しているため、その名を聞くことは割と多かったりもする。
「へえ、すごいな。俺でもレベル５に会う機会なんてないのに」
「ふふん。持つべきものは先輩ですよ、藍咲さん」
得意げに言う初春。
藍咲と佐天はその様子をやや苦笑しながら見ていた。
「はは、それじゃあ俺は行くよ。向こうもあんまり待たせたら悪いし」

「あっ、そうですね。すみません、引き留めてしまって」

「いいっていいって。じゃあね」

ひらひらと手を振りながら藍咲は歩き出す。

初春がさよならー、と言う隣で佐天がぺこりと軽く会釈をしたのが見えた。

◆

レンガ造りのビルから出てきた藍咲は遺留品の現物が入ったケースを持っていた。
一七七支部の支部長、固法美偉と親しいということもあって現物を貸してもらえることになったのだった。

（よっしゃ、さっさと帰るか）

まだ日は高い。
自分の支部に帰ってやることはまだ山ほど残っている。

（それにしてもレベル5かあ…）

茹だるような暑さの中、ここに来る前の初春とのやり取りを思い出す。
やはり能力者である以上、藍咲にも高位能力者への憧れが無いといえば嘘になる。
だがしかし現実はそんなに優しくはない。
憧れは自己否定から来る感情だといつか誰かが言っていた。
結局はどこかで憧れとの折り合いをつけなければ先へ進むことは出来ないのだろう。

実際のところ学園都市最高峰の長点上機学園に在籍しているという

だけで
周囲からは羨望の眼差しを向けられる。
学園のポリシーを知らない人間からしてみれば長点上機の生徒イコール高位の能力者なのだ。
自分の身の丈以上のその過剰な期待と羨望は、幾度と無く藍咲を苦しめてきた。
おまけに能力者としては特に優れているという訳ではないにもかかわらず、
一般の学生がそう易々と得ることの出来ない風紀委員幹部という地位にいる自分。
いやむしろ、そのような地位にいるからこそ、他人に必要以上の期待を抱かせてしまうのだろう。
根本にあるのは自分の能力（ちから）への渇望や願望。
のほほんとした藍咲でも焦燥を覚えないわけではないのだ。

（結果はあとから付いて来る、とも言うけどねえ）

だがそれよりも藍咲には気がかりなことがあった。

――それは自分の過去。

彼は自分の能力発現前後の記憶があまり無い。
どこかの施設のようなところに居たことは朧気ながら覚えている。
つい二、三年前までいた中学校のことは当然はっきりと記憶にあるのだが、
それより前の小学生の頃の事を思い出そうとすると、とたんに頭の中が霞がかったようになり
いつもの頭痛に見舞われるのであった。

両親の顔もぼんやりとしか思い出せない。
学園都市の外にいるのか、はたまた既にこの世には居ないのか。
それすら明確には分からなかった。
『心理掌握（メンタルアウト）』にでも記憶を引き出してもらおうか。
そんな冗談じみた馬鹿馬鹿しい考えまで浮かぶ始末だ。
そんな事をぼんやりと考えながら道を曲がり、大通りに出た
その刹那、

ぞわっ、と全身が粟立つ。

（なんだ……！？）

周囲の景色が急速に滲んでいく。
熱中症かと一瞬思ったが、意識ははっきりしている。
ゆらゆらと、まるで街全体が陽炎になったかのように感じる。

次の瞬間。

ズドォォォォォ……

近くで凄まじい轟音とともに夏の昼下がりの熱風が吹き荒れる。
はっと我に返って周りを見回すが、景色はいつも通りはっきりとした輪郭を持ってそこにあった。

（今のは……？）

ひとまず音のした方に向かう。
通りを渡り、路地を抜け、道路に面した広場に出る。

「なっ……」

そこで藍咲が見たもの。
あっけに取られている通行人、
道路を挟んだ向かい側の銀行の破れたシャッター、
道端で伸びているいかにも不良然とした少年たち、
アスファルトにまっすぐ刻まれた深い溝、ひしゃげた乗用車、
通りの真ん中に立つ一人の少女と青白い火花。
そしてその脇にいる見慣れた後輩の姿。

「藍咲さん！」

路肩のバスの脇にいた初春が藍咲に気付いて声を上げた。
その近くには小さな少年を抱きかかえている佐天。

「あ……うげ……藍咲さん、ですの？」

その初春の声に反応して、見慣れたツインテールの少女が妙に機械的な動きでこちらを向く。

「初春、警備員に連絡は？」

「し、しました」

「そうか、よし」

藍咲は曲がっていた風紀委員の腕章を直すと言った。

「……で、話を聞かせてもらおうか。白井」

Jul 16th "Judgement" end

七月一六日　風紀委員の日々―Ｊｕｄｇｍｅｎｔ　（後書き）

もしかしたら次回投稿まで多少空いてしまうかもしれません。

ちなみにですが本編に出てきた風紀委員の後輩女子はショートカットです。いいものです、ショートカット。

七月一七日　活動報告其ノ壱｜Ｇｒａｖｉｔｏｎ

七月一七日　活動報告其ノ壱｜Ｇｒａｖｉｔｏｎ

「直近の報告は以上です、逆月委員長」

学園都市の行政と司法の中心、第一学区にある風紀委員本部ビルの一室に藍咲はいた。

「いやはや、君も毎度大変ですねえ。藍咲くん」

風紀委員長、逆月御影（さかづきみかげ）はそう言うと藍咲からの報告書を机に置いた。

藍咲は支部長と幹部を兼任しているため、本部付きの他の幹部たちよりも格段に忙しい。

だがその激務もなんとかこなしてはいるので、本部でもそれなりの信頼を勝ち得ているらしかった。

「いえ…今の季節は事件が増えますからね。しょうがないですよ。例の案件もありますし」

藍咲は風紀委員になった後の研修で受けた環境犯罪学の講義を思い出す。

犯罪対処の為には同じ治安維持組織である警備員との連携が一層必要なのだが、

警備員が『大人』であるのに対し風紀委員は『子供』であるためか、両者の関係は『協力』というよりも『上下』というのが実情だった。

「虚空爆破事件（グラビトン）については第七学区の支部長たちに調査の指示を出しています。

君も相当頑張ってくれているようですが、少しは彼らに任せてみてはどうです」

逆月は柔らかい笑顔を浮かべて言った。

藍咲は少し困ったようにそれに答える。

「はあ、そうは言ってもですね…」

「気がかりなのは一七七ですか？」

いたずらっぽく逆月が言う。

一七七支部（というよりも白井黒子）の度重なる管轄外活動の噂は藍咲を通して既に風紀委員長の耳にも届いていた。

だからといって一七七支部を冷遇しない逆月を藍咲は、

委員長がそれでいいんだろうかと思いながらも慕っていた。

「まあ、実績もありますし、良い連中だとは思いますけどね…」

実際藍咲は文句を垂れながらも彼らの事を憎からず思っていた。
というのも、もともと固法とは同期で風紀委員になったときからの友人。
彼女は藍咲の風紀委員としての『謎の』出世の事を素直に喜んでくれたうちの一人でもある。
その固法に会わせたい子がいると紹介されたのが誰あろう白井黒子であった。
風紀委員としても能力者としても優秀な彼女だが、始末書の数も群を抜いている。
友人の後輩は今やすっかり頭痛の種となっていた。

「ははっ、面倒見の良さは君の長所だと思いますよ。藍咲くん」

逆月のメガネの奥の瞳が柔らかい光をたたえている。

藍咲を支部長、そして幹部に抜擢した張本人。風紀委員長逆月御影。
以前藍咲は自分の抜擢の理由を尋ねてみたりもしたが、「それは僕が君を信頼している証ですよ」
などと上手くはぐらかされてしまっていた。

彼に初めて会ったとき、藍咲はこの人物が委員長というポジションにいることに妙に納得してしまった。
すらりと細い体躯にメガネの奥にはいかにも切れ者らしい、鋭い瞳が覗く。
ここまで委員長らしい委員長もなかなかいないんじゃないかと藍咲は常々思っていた。

「ものは言い様って奴ですね……ありがとうございます。
では、俺は支部に戻って調査を。失礼します」

軽く会釈をすると藍咲は部屋から出て行く。
逆月はその背中をにこにこと見つめていた。

◆

話は昨日に戻る。
銀行強盗を制圧した（らしい）現場にたどり着いた藍咲は警備員が到着するまでの間、
白井の状況説明と弁明を聞いていた。

「…ですから、私は風紀委員としての正当な職務を全うしただけであって…」

白井が心底厄介そうに説明する。

「あのね…それはわかるけど、なにもここまでやることはないだろ…」

そう言って藍咲は爆風で溝の刻まれた道路と舞い上がった車が墜落して出来たクレーターを指した。

（うぐ…さすがに今回ばかりは言い逃れ出来そうにありませんわね…）

今までは事後報告、つまりは始末書の形で事実を伝えていたが
『現場』を押さえられたのは今回が初めてだった。

「白井」

「はい？」

藍咲の言葉に白井はぴくりと反応する。
「始末書、楽しみにしてるから」
「う……く……了解、ですの…」
有無を言わせぬ藍咲の言葉に白井はただ首肯するしかなかった。
「ところであの車ふっ飛ばしたのはあっちの子でいいんだよな」
苦虫を噛み潰したような表情の白井に藍咲は尋ねる。
「ええ」
「それじゃ、あの子が超電磁砲ってことか」
「あら？よくご存知ですわね。その通りですの」
「いや、さっき初春に会ったときに、これから常盤台の超電磁砲に会えるんですー、とか言ってたからね」
「ああ……そうでしたのね……」
妙に疲れた様子で白井が言う。
藍咲はそれを特に気にかけるでもなく、『常盤台の超電磁砲』の方に近づいていった。
「どうも、はじめまして。白井の上司で風紀委員第一四三支部の藍咲です。
今回は事件解決にご協力ありがとう、御坂美琴さん」

「えっ、わ、わたしは別に…」
急に声をかけられ、どこか遠くを見ていた様子の美琴は少し慌てて
そう答えた。
「本来は」
藍咲はほんの少し、語調を強める。
「一般人である君を介入させた白井も、首を突っ込んだ君も、それ
なりの責任を負ってもらうことになるんだけど」
美琴の眉が不快そうにぴくりと動いた。
藍咲はその場をぐるりと見回すと言葉を続けた。
「……まあ今回はその辺大いに情状酌量の余地があるみたいだし、
ここは素直に感謝だけしておくよ」
白井から既にある程度の状況を聞いていた藍咲はそう言うともう一
度ありがとう、と言った。
美琴はさも意外そうに目を丸くしている。
人質の少年のこと、人質を守ろうとして殴られた佐天のこと、そし
て友人を傷つけられて逆上した美琴のこと。
公私混同かもしれないが、藍咲は杓子定規でその責任を取らせると
いうことに抵抗を感じていた。
とはいっても、他の風紀委員への示しを付けるという意味で白井に
は始末書を書いてもらわねばならない。
幹部としての立場はこういう判断を下すときにも役に立つ。

それに逆月ならこの程度のことを特別咎めたりはしないはずだという確信が藍咲にはあった。

「……ど、どうも」

美琴が複雑そうな表情で会釈をする。

「『もし次があったらその時は』もう少し手加減してくれよ」

皮肉とも取れる言葉を残して藍咲は歩道に座り込んでいた佐天の前まで行くと、

少し離れた場所にいた初春に向かって言った。

「おーい、初春ー」

「は、はい！なんですか？」

「絆創膏持ってるー？」

「持ってます！今行きますね！」

初春が近づいて来るのを確認すると藍咲はしゃがんで佐天に声をかけた。

「大丈夫？」

「あ…はい」

「大丈夫ですか！？佐天さん！」

初春が佐天に駆け寄る。

「あっはは…心配性だなあ、初春は。だーいじょうぶだって！」

「よかったあ……。今絆創膏張ってあげますからね」

佐天の手当を始めた初春に藍咲が話しかける。

「じゃあ、あとの事は任せるわ。俺早めに支部に戻んないといけないし」

「はい、わかりました」

初春が力強く答える。

彼女の秘めたる芯の強さは藍咲も認めるところだった。

藍咲は立ち上がると白井に頼んだぞ、と目配せすると足早にその場を去っていった。

◆

それが昨日の話。
暑さでうすぼんやりとした頭でそれを思い返しながら、藍咲は一四三支部のドアの前に立った。
壁に取り付けられたパネルに手をかざすと生体認証によってロックが解除される。
部屋に入った藍咲は真っ先に一人の男の所へ近づいていく。

「領兵、書庫との照合はどう？」

『一応、すべてのデータを突き合わせたが、どこにも不備はない。極めて正確だ』

男は一切口を動かしていないにもかかわらず、藍咲を始めそこにいた全員に二人の会話が聞こえていた。
———レベル３の精神感応（テレパス）。
それがその男、長点上機学園の藍咲の同級生、梓馬領兵（あずまりょうへい）の能力だった。癖なのかなんなのか、よくは分からないがとにかく梓馬には常に能力を使って他人と会話をするという変わった一面がある。
（実は周りの音などに影響されない分、梓馬の『声』は小さいが非常に聞き取りやすい）

「データの食い違いはあり得ない、か……ますますわかんないな」

『ああ』

梓馬の声が直接頭の中に響く。

「量子変速自体が希少能力（レアスキル）だから、この際下位の能力者も片っ端から当たってみるっていうのは？」

『悪くは無いが、現状から言えば下位能力者はシロだ。事象規模はレベル４相当。あらぬ疑いを掛けることにもなりかねない』

「確かに……」

藍咲は言葉に詰まる。

「この短期間で急激に強度が上がった、なんてことはあり得ないしなあ」

それがあり得るなら俺はこんな苦労はしてないよな、と藍咲は愚痴

る。
もちろん後半は心の中で。
『あり得ない可能性について議論していても仕方がない。
ここはもう一度根気よく調べるしかないだろう』
「はは…手厳しいね…」
肩をすくめる藍咲。
長点上機のリアリスト筆頭、梓馬との議論では何かと押し負けることが多い。
『……ともかくあまり悠長な事は言っていられない。
今はまだ怪我程度だが、さらに規模が拡大すれば本当に犠牲になる者が出るかも知れない』
「そうだな。第七学区の支部も頑張ってるみたいだし、俺たちも負けてらんないな！
……ああ、そういえばこの前言ってたやつは？」
藍咲が尋ねる。
『お前が本部に行っている間に完成した』
「わお。さすがだねえ」
梓馬が作っていたというのは風紀委員で過去に処理した、または現在処理中の事件についての
統括的なデータベースだ。
膨大なデータを関連付け、凄まじい速度でシステムを組み上げる。

梓馬の最大の『力』は、その情報処理のスピードだった。
あの初春ですら、梓馬には多大な尊敬の念を寄せている。
梓馬のほうも『情報処理の一点突破』という、自分との共通項になにか思うところがあるのか、
何かと初春の事を気にかけているようだった。（あくまで藍咲の想像だが）

「それじゃあさ、これを第七学区のそれぞれの支部でも使えるようにしてくれないかな。
被害はあそこだけな訳だし、こういう便利なものは一支部で独占しないほうがいいだろうし」

『わかった。このデータベースは本部のサーバーに間借りしている状態だ。
それを彼らに開放してやればいい。問題ない。すぐに完了する』

そう言うと梓馬は軽やかにキーを叩き始めた。

「よっしゃ、頼むな」

藍咲の言葉に梓馬は無言で頷いてみせた。
それを見た藍咲はようやく自分のデスクに行くとふう、と息をつく。
すかさずそこにいつもの後輩女子、日向葵衣（ひなたあおい）がぱたぱたとやってくる。

「おかえりなさい！藍咲先輩！すみません、結局仕事は梓馬先輩がやってくれちゃいました」

どうやら昨日頼んだ調べ物をずっとやってくれていたらしい。
大方、それを見かねた梓馬が無言で引き継いでやってのだろう。

「いや、ごめんな。なんか押し付けちゃったみたいで」

「いえいえ、気にしないでください！」

その時、珍しく支部の外に取り付けてあるチャイムがなった。
藍咲は立ち上がると出入口の横に取り付けてあるモニターの前に行く。
映っていたのはいたのは宅配業者だった。

「はい」

「宅急便です。風紀委員一四三支部宛とありますが、こちらでよろしいでしょうか」

「はい、そうです。今取りに行きますね」

藍咲はそう言ってドアを開け、階段を降りるとさらにそこあったドアを開けた。
外に居た宅配業者から荷物を受け取り、伝票にサインをすると再び室内に戻る。

「なんだこれ。なんか注文したっけ」

どういうわけか伝票に品名が書いていない。
なんとなく嫌な予感がする。気のせいだろうか。

「領兵、ちょっと置かせてもらうよ」

『ああ』

データベースの解放作業を終えた梓馬は既に別の作業に移っていた。
そのＰＣモニターの脇にダンボール箱をまさに置こうとした瞬間、

「藍咲先輩！新作のお茶ですよーっ！」

元気の良い声とともに日向が藍咲に向かってきた。
お茶がこぼれないようにじっとコップを凝視しながら危なっかしく
近づいてくる。

「え、ちょっ、今は」

「え？なんですかってうわっ！」

藍咲は止めようとしたが時既に遅し。
日向は何も無い床でつんのめって藍咲の背中に突っ込んできた。

「あっ、ばかっ…」

持っていたダンボール箱をそっと置こうとしていた藍咲は、バラン
スを崩して
箱を思い切り梓馬のデスクに叩きつけてしまった。
その瞬間、

ボカン

少々間抜けな音とともに目の前の箱が爆発した。
それに続いてまるでマシンガンの掃射のようにババババババと火花
が炸裂する。

一気に支部内に緊張が走った。

「藍咲さん！大丈夫っすか！！」

「水もってこい！あ、いや消化器！」

そこにいた後輩たちはあわてふためいてバタバタと動き出す。

（なんなんだよこれは！）

「まさか例の事件…？」

咄嗟にしゃがみ込んで難を逃れた藍咲はすぐにそう考えた。
それもそのはずだ。あまりにもタイムリー過ぎる。

「重力子の加速は！？」

「え？あ、い、いえ、観測されていません」

（グラビトンじゃないのか…？だったら一体何なんだ？）

「領兵！おい、大丈夫か！？」

『……』

驚いたことに梓馬はキーボードを打っていた姿勢を全く崩していなかった。
だが無残にもかけていたメガネはレンズが砕け散り、だらしなく右耳に引っかかっているだけだった。
なんとも痛ましい。

一方で藍咲の背中に突っ込んだ日向は相変わらず倒れ伏していた。

（いっててて…もう…）

その時、彼女の目の前に吹き飛んだ箱の破片と思しき物体が舞い降りる。

よく見るとそれは伝票だった。

それを見た日向は唐突に声を張り上げる。

「あーっ！！忘れてた！！」

その大声にビクッと全員が固まった。

ようやく石化がとけた一人の男子が尋ねる。

「な、なにを…？」

すると日向はなぜか照れくさそうな顔をして答えた。

「えへへ…わたしね、花火、頼んでたんだ」

はあ？

全員の声が重なった。

「日向、花火って？どういうこと？」

藍咲が聞く。

「ほら、夏ですし、せっかくだからみんなで花火大会でもしようか

なーって…
学園都市謹製の超爆裂かんしゃく玉をサプライズで……あ、あれ…
藍咲先輩？…なんですか…？
…そんな、怖い、顔、して……」

徐々に小動物のようにぷるぷると震えだす日向。
今度は彼女が藍咲の背後に般若を幻視する番だった。

「ひぃぃぃぃなたぁぁぁぁぁっ！！！！！」

「ひゃぁっ！ご、ごめんなさいっ！！」

「花火大会でかんしゃく玉だあ！？一体どんなセンスしてんだよお前は！！」

そっちかよ、と一同は心のなかで突っ込んだ。

そしてギャーギャーと賑やかな中で、そこだけまるで焦土のように黒い煙が細くたなびくデスクの上に
ついに力尽きた梓馬のメガネが落ちて砕けた。

◆

「もう少し……もう少しで……」

真っ暗な部屋にＰＣのモニターの光が煌々と灯る。
机の上には音楽プレイヤーと大量のスプーン。

力を欲する弱き心は、既に許されざる領域にまで踏み込んでしまっていた。

Jul 17th "Graviton" end

七月一七日　活動報告其ノ壱―Ｇｒａｖｉｔｏｎ（後書き）

お待たせしました。
更新のペースはあまり早くはないのでゆっくりと待って頂けるとありがたいです。

あ、後輩女子に名前が付きました笑

七月一九日　活動報告其ノ弐―Ｌｅｖｅｌ　ｕｐｐｅｒ

「……っ！」

早朝まだ明るくなり始めた時間に、藍咲は飛び起きた。
その日もまたいつもと同じようにあの『夢』を見ていた。

「……いっ……！」

ところが、今朝は明らかに様子がおかしい。
意識が遠のくほどの頭痛が藍咲を襲う。こんなことは初めてだった。
藍咲は両手で前頭部を押さえながら必死に痛みに耐える。
押し殺した苦しげな呼吸だけが部屋に響く。
夢の内容はいつも同じだった。

『陽炎のような街』を歩き回り、最後に『彼女』が出てくる――――。

（いや違う……）

どこが？

藍咲は夢の中身を反芻する。

そして思い出した。

『彼女』の言葉だ。

いつもならほとんど聞き取れないはずのその言葉が、何故か今日ははっきりと聞こえたのだ。

（『たすけて』……）

一言だけ、確かにそう聞こえた。

◆

――第七学区　『セブンスミスト』付近　路地裏

「……っ……歯を食いしばれ！！」

怒気を孕んだ声とともに、美琴が拳を振り下ろす。

「ぐぶ…う…っ」

連続虚空爆破事件の犯人、介旅初矢は右頬を殴られた衝撃に呆然としていた。

美琴はなお介旅を睨みつけていたが、「ったく」と吐き捨てると踵を返してその場を去っていった。

介旅は信じていた。
絶対的に正しいのは自分で、その自分に危害を加える不良たちも、いざという時には何も役に立たない無能な風紀委員も皆、悪なのだと。
しかしそれを皆にわからせるには能力が必要だった。
所詮レベル2程度の自分ではいつものように無理やりねじ伏せられるだけだ。
――そうだ、能力さえあればいい。能力さえあれば、すべてが上手くいく。
――そして能力を手に入れ、力を振りかざす高位能力者どもを殺してやる。

独り善がりなその『幻想』は、彼女の『右手』で粉々に破壊された。

七月一九日

活動報告其ノ弐_Level upper

◆

「以上で報告を終わります」

固法がそう告げると、集まっていた風紀委員支部長たちに広がっていた緊張が一気に解けていく。
ある者は思い切り伸びをし、またある者は大きなあくびをしていた。
その中で

「お疲れ。固法」

やや顔色の悪い藍咲が固法に話しかける。

「ありがとう、藍咲君。ていうか大丈夫？顔色悪いわよ？」

こちらも連日の捜査で疲れ気味の固法が答える。
それもそのはず、連続虚空爆破事件はめでたく昨日解決したもののこの支部長会で報告する内容をまとめるためにろくに睡眠時間もとれなかったのだ。
それに自分の支部の後輩が、犯人のターゲットになったとあっては落ち着いても居られなかっただろう。

「いやあ、大したことないよ。ちょっと寝覚めが悪かっただけで……はは」

「まったく……あなた無理しすぎなのよ」

呆れ顔で固法が言う。

複雑な立場も相まって藍咲の元には常に何かしらの面倒事が飛び込んでくる。

同じ支部で活動しているわけではないが、若干の嫌な顔はしつつ何でもかんでも一人でをこなそうとする藍咲の姿は容易に想像できる。

そんな藍咲に固法は知らず知らずのうちに白井の姿を重ねていた。

経験を積むにつれて徐々に成長してきてはいるものの、彼女の根本的な部分は新人研修の頃からあまり変わっていない。もっと周りを頼ればいいのに、といつも思う。

（危なっかしいのよ……あなたたちは）

放っておけない、まるで親心だと固法は一人で可笑しくなって思わず表情が緩んでしまう。

「まあまあ。あれ？どうした？」

それを目ざとく藍咲に指摘される。

「なっ……なんでもないわ」

「……まあいいや。ところで初春は？大丈夫だったの？」

「ええ、幸いかすり傷ひとつなかったわ。

でも今日は風邪で寝込んでるみたい。一気に疲れが出たんでしょうね」

その場にいなかった固法ですらこの疲れようなのだから、当事者の精神的負担はさぞかし大きかっただろう。

今回の事件は一七七支部の活躍で解決出来たようなものだ。

非番の白井ともども、初春が復帰したら差し入れでも持って行ってやろうかなと藍咲は考えていた。

◆

藍咲たちが支部長会で集まっていたのとちょうど同じ頃、琴峰は『第七学区のゲーセン』の近くを歩いていた。

（ったく、あっちいな……）

琴峰は藍咲ほど暑さに弱くは無かったが、それにしてもこの気温は堪える。
今はゲームセンターもひとしきり遊んで飽きてしまい、暇を持て余して彷徨っているところだった。

（あーあ、藍咲のやつも風紀委員の仕事だっつーしな……しょうがねえか）

既に一度帰って私服に着替えた上でここに来ている。
わざわざ勉強するためにまた帰るなどという選択肢は始めから琴峰の中には無かった。

（よっし）

結局逡巡の末、寮の部屋に帰ってエアコンの効いた涼しい中で惰眠を貪ることに決めたのだった。
目的が定まってしまえば後は早い。早速第一八学区を目指して歩き

始める。

学園都市の各学区はそれぞれが異なる特色を持った『街』だ。
全体が洗練された作りの第一八学区に比べ、第七学区は賑やかな繁華街から寂れた路地裏、
さらには統括理事長が住まうと言われる『窓のないビル』まで、その雰囲気は雑多だ。
琴峰としては小奇麗に画一化された第一八学区よりも、生活感にあふれたこの第七学区の方が性にあっている
ようにも思える。これはおそらく自他共に認めるところだろう。

夏の日差しの中、普段気だるそうに歩く藍咲の何倍もダルそうに歩きながら、琴峰はそんな事を考えていた。
やがて第一八学区へ向かう地下鉄の駅の入り口が見えてきた。
その手前の路地を通りすぎようとした時、

「おい、そこの兄さん」

不意に路地の奥から誰かに呼ばれた。

「あん？」

とんでもなく緩慢な動きで琴峰は声のした方を見る。
声の主はいかにもといった感じの不良少年だった。近くに二人、同じようなのがいる。

「そうだよ、そこのあんた。やけにつまんなそうじゃねえか。
どうだ、俺らとおもしれえ話しねえか？」

ニヤニヤと下卑た笑いを浮かべながら、彼らは琴峰のほうを見る。

街を歩けば割と高確率で通行人に不良っぽい印象を植えつけてきた琴峰だったが、
こんな下品な連中に因縁を付けられる覚えなど微塵もなかった。
琴峰は軽く舌打ちをすると彼らを睨み返す。

「なんだ、お前ら」

「おいおい、そんな怖い顔すんなって。俺らはただあんたにおいしい話があるんだよ。
そんなとこ突っ立ってねえでこっち来いよ」

どうせこの手の不良は下位レベルの能力者だろうし、たとえ攻撃されても自衛するぐらい訳無い。
――なにより今は暇だ。
そう考えた琴峰は彼らの誘いに乗ることにした。

「おーおー！ノリがいいねえ」

三人は琴峰の外見を見て同類だと勘違いしたらしい。やけに馴れ馴れしく接してくる。

「で？なんだ？」

琴峰は不機嫌そうに言う。

「いやなに、ちょっとしたビジネスの話ってやつさ」

最初に声をかけてきた真ん中の男が話し始める。
横の二人は琴峰を値踏みするようにじろじろと見ていた。

「ビジネスだ？まあいいや、話だけは聞いてやる」
とりあえず暇つぶしにはなるだろうと琴峰は考えた。
「へへっ。そう来なくっちゃな」
交渉成立とばかりに男が話し始める。
「――あんた、レベルアッパーって知ってるか？」
男が口にした言葉に琴峰は聞き覚えがあった。
つい最近ネットで見つけた都市伝説。
――能力のレベルを引き上げる夢のアイテム。
別にそんなもんいらねえよ、と琴峰はそれを記憶の片隅に追いやっていた。
自分の人生が上手くいかないのをすべて能力のせいにするようなやつが考えそうなことだ。そう考えていた。
ともすればとんでもなく傲慢にも聞こえるが、彼とてレベル４に至るためには想像を絶する労力を費やしてきている。
やれ努力だ何だと徹頭徹尾精神論を語ってくる輩は好かなかったが、かと言って最初から何もせずに自分の力で解決することを放棄した人間を認める気にはなれなかった。
「ああ、あれだろ。都市伝説の」
琴峰の言葉に男は嬉しそうに答える。

「さすがよく知ってるねえ。そうさ、そのレベルアッパーだ」
「で？それがなんだ？言っとくけど俺は持ってねえぞ、そんなもん」
「まーまーそう慌てんなって」
男はやや声を潜めると続けた。
「ここだけの話、俺らはそいつを手に入れるルートを持ってんだよ。今それを売りさばくメンバーを集めてんだ。どうよ。俺らと組んで儲けねえか？」
（なるほどな）
レベルアッパーの存在の真偽については彼らが嘘を言っている可能性もあるためはっきりしない。
が、おそらくこの話に乗れば大方稼がせるだけ稼がせておいて、金を回収した後はトカゲの尻尾切りにでも使われるのだろうと琴峰は推測した。
これはまたえらく下に見られたものだと思った琴峰は、付き合うだけ時間の無駄だったと結論付けた。
「あー、わりいな。俺興味ないわ」
そう言うとさっさと路地を出ようとする。
「なっ、待てよおい！あんたバカか？良い商売なんだぞ！」
早く涼しい部屋に帰って寝よう。

その一心で琴峰は男の「バカ」という言葉を努めてスルーした。
男はさらに続ける。

「こいつを使って下位レベルの負け犬どもからガンガン巻きあげてやろうぜ！」

その時琴峰の脳裏に浮かんだのは、ある男の姿だった。
身の丈を遥かに超える期待と羨望に押し潰されながらもいつもどこかあっけらかんと笑う、とある友人。
なぜか一向にレベルが上がらないことをボヤきつつも、なんとかならないかと悪戦苦闘するその姿を
琴峰はすぐ近くで見てきた。

不良の言葉は、その友人を酷く貶めるものに聞こえたのだ。

それは自意識過剰だったかもしれない。
だが酷く虫の居所が悪かった琴峰はその言葉を看過することが出来なかった。

「……おい、今なんつった」

すっと立ち止まると、異様に冷静な口調で琴峰が言う。

「あ？だから言ったろ、バカどもから金を巻きあげて……」

言い終わらないうちに、バチバチバチッと青白い閃光が男の身体を貫いた。

「あがががががが」

びくびくと痙攣しながらどさりと男は崩れ落ちた。失神している。

「ひいっ……！！」

残る二人はそれにすっかり怖じ気付いて凍りつく。
琴峰の額の辺りにはまだ青白い電流が走っているのが見えた。

「ったく、くそったれが」

口汚く罵倒すると二人を睨みつける。
男たちは再び縮み上がってその場に釘付けになる。
それを見た琴峰は舌打ちをするとつまらなそうに歩いて行った。

◆

固法と別れた藍咲は、支部に少し顔を出してそのまま帰ろうと考えていた。
いつものようにロックを解除してドアを開ける。

「あ！おかえりなさい！藍咲先輩！」

日向が元気よく迎える。
奥のデスクでは梓馬が相変わらず何やら作業に打ち込んでいるようだった。
驚いたことにメガネが元通りになっている。

「領兵、メガネ買った？」

梓馬がちらりとこちらを見ると同時に頭の中に声が響く。

『……これは予備だ』

梓馬のドヤ顔というのがあるならば今の表情がまさにそうだろう。
もっとも、付き合いの長い藍咲ぐらいにしかわからないだろうが。

「どうでした？支部長会」

横から日向が声を上げる。

「連続虚空爆破事件は第一七七支部の活躍で無事解決、だってさ」

「これで一安心ですね！でもいいなあ、私も固法先輩に会いたかったです…」

いかにも残念そうに日向が言う。
彼女曰く、固法はストライクゾーンど真ん中の理想の先輩だそうだ。

「まあ、今回は第七学区の支部長会に幹部として特別に出席したわけだしね。
いいじゃん、今度個人的に会ってくれれば？」

藍咲がそう言うとなぜか日向は照れくさそうにくねくねとし始めた。

「えーっ！でもぉ……そんな……私……」

両手で頬を包みながらにやけている。
収集がつかなくなりかけていることを察知した藍咲は全力でスルーすることにした。

「ところで領兵」

『どうした』

「事件自体は解決したけど、書庫のデータと被害状況が一致しない理由はまだわかんないんだよな」

実は今回の虚空爆破事件だけではなく、他にも何件か本来のレベルと被害状況が一致しない事案があったのだった。

『ああ。それに今回の捜査過程で書庫のデータは正確であることが証明されている』

梓馬が正確にそう告げる。

「結局わかんないこと尽くしか」

『だがひとつ気になることがある』

「気になること？」

『ああ。今までは愚にもつかない噂話程度にしか認識していなかったが……』

そう言って梓馬がキーボードを叩くとモニター上にひとつのウィンドウが表示された。

藍咲はそれを覗き込む。どこかの掲示板のようだ。

「……レベルアッパー？」

『最近ネット上で広まっている都市伝説だ。

使うだけで簡単にレベルを引き上げることができるというものらしい』

「へえ……レベルアッパー……か」

掲示板にはそれを使った者の話や、譲って欲しいなどといった話が書きこまれていた。

「確かにこれが本当なら説明は付くな」

『あくまで都市伝説の域を出ないが、こちらも調べてみる価値はあるだろう。

可能性は一つづつ潰していくのがセオリーだ』

珍しいな、と一瞬藍咲は思った。

てっきり梓馬はこの手の噂話を一蹴するものだと思っていたからだ。

確かに他に思い当たるものが無い以上、『これ』に当たっていくしかないという点に関しては

藍咲も否定は出来なかった。

「確かにそうだな……」

『俺はしばらくこれについて調べてみようと思う』

「そうか、それじゃ俺もこれから……」

「だーめーでーす！」

唐突に日向が話に割り込んできた。

「藍咲先輩ほんとは今日非番じゃないですか！最近ただでさえ支部に缶詰だったんですから

今日は帰ってゆっくり休んでください！働きすぎでぶっ倒れる前に！」

言い聞かせるようにそう言う。

『それについては俺も同意だ。今日はもう帰るといい』

これまた珍しく梓馬が労うような言葉をかけてきた。

「え、お、おう。じゃあお言葉に甘えて……」

「はい！お疲れ様です！」

『…』

二人はそう言うと（梓馬は無言だったが）藍咲を送り出した。

藍咲は支部から出ると寮に向かって歩き始めた。

（能力のレベルを引き上げるアイテム、ねえ）

自分もレベルが上がらずに悩んでいる身としては、あまり人事のようにも思えなかった。

しかし、

（俺には必要ないな。自分の力で手に入れてこその能力だろ）

一瞬心に生まれた迷いを早々に割り切ると、藍咲は鞄を持ち直して足を早めた。

後輩と友人の心遣いを感謝しつつ今日は速攻で帰って爆睡しよう。

◆

そんなことを考えていた。

「…ええ、今のところは特に。はい」

「ですが、力場のパターン変動の水準が高くなってきているようです。

はい、例の『人為的干渉』との因果関係は不明ですが」

「それで、『向こう』のほうは？」

「そうですか。やはり『あちら側』に踏み込むとなるとタダで、というわけにはいかないでしょうね」

「了解しました。引き続き監視を…」

「はい？…それはもちろんです」

「少なくとも」

「今はまだ『眠って』いてもらわなければなりません」

「それでは」

そう言うと電話を切ってＰＣのモニターに目を落とす。
表示されていたのはなにかの実験記録のようだった。

（ある意味、レベル５上位よりも厄介な存在かもしれませんねえ）

『ＡＩＭ－Ｅｍｕｌａｔｏｒ』

冒頭の一文にはそう書かれていた。

Jul 19th "Level upper" end

七月一九日　活動報告其ノ弐―Ｌｅｖｅｌ　ｕｐｐｅｒ（後書き）

ショートストーリー的なやや雑多な感じになってしまいました。

ここから徐々に超電磁砲本編との交点が増えていくかと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6617t/

ワールド・エンド・サマー

2011年9月30日14時21分発行